・科学好きの芽を育てる ～中学校科学部の実践～ (尾池萌)

本発表では、科学部で取り組んできた多様な活動と、その教育的意義について紹介しました。活動の中心は、「理科って楽しい」「やってみたい」と思わせる体験型の実践です。

● 体験から始める

カルメ焼きやジオードづくり、葉脈標本、ちりめんモンスター探しといった活動は、生徒たちが五感と好奇心を使って理科の現象に触れる機会となった。ゲーム要素を取り入れた「漢字でGo!」や「無人島脱出ゲーム」では、知識の定着や仲間との協働、理科を使う楽しさが育まれた。特に、学びに対して苦手意識を持つ生徒にも効果的であると実感している。

● 畑で野菜づくり

学校の畑での野菜栽培では、日々の世話を通じて植物の成長や自然のサイクルを体感的に学んだ。スイカのつもりがユウガオが実ったというハプニングからは、調べ考える力が自然と養われた。

● 人とのつながり

生物の飼育活動では、カメを通じた日常的な観察の中で、主観的な感想から数値的な記録へと意識が変化し、「観察力」や「科学的まなざし」が育った。生徒間の交流も生まれ、理科室が学びと人が交差する場となった。

また、地域とのつながりも大切にしており、ちいさな理科館（吉田町）と連携した小学生向け講座を継続して実施している。身近なものや現象を活かした内容で、部員たちは教えることで学ぶ姿勢を身につけ、「科学を伝える力」「臨機応変な対応力」「責任感」を伸ばした。

このように、科学部の活動は知的好奇心の芽を育て、学びの入り口として大きな意味をもちました。一方で、より深い「問い」や「探究」へつなげていくことが今後の課題です。科学部がなくなった後も、この3年間の実践を授業や学校全体に広げていくことが今後の目標です。

(執筆：尾池)